

第3章 二度目のイラン勤務

ある全国紙の 80 年元旦号一面 4 つの記事のうち 3 つまでが私の所属していた中東 2 課の主管する問題であった。米大人質事件、イラン・イラク戦争と年末に起こったソ連軍のアフガン侵攻である。そうしたあわただしい状況も次第に落ち着き、81 年夏には中東 2 課を離れて、イランともある程度距離を置くようになった。

そんな中、83 年 9 月には再度イランに勤務する事になった。革命後一度は、現地出張の経験はあったものの、やはり生活環境を含めて状況は相当に変化しており、そうした事情を自分で確認するため、安倍外務大臣のイラン・イラク訪問にお供してもらった。日本は戦争中のイラン・イラク両国と友好関係を有する数少ない西側諸国ということで両国に和平実現のため働きかけをしていた。今回は大臣自ら出張しての働きかけである。

私自身は、赴任準備のために現地を見るという事で比較的気楽な出張であった。

テヘランの状況

久しぶりのテヘランは、主要な大通りの名前こそ変わっていたが、革命で大きな破壊があったわけでもなく、また、革命からそれほど時間がたっているわけでもないで、町の構造が見違えるほどといったものではなかった。

これは、87 年 9 月にテヘランを離れ、その後長い間訪れる機会がないままに、02 年 1 月、15 年ぶりに再びテヘランを訪れた際の印象とは大違いである。

アフガン復興支援東京会議の直前に緒方アフガン支援総理代表にお供して、アフガンを訪れた際、アフガンの復興に深いかかわりを有する周辺国としてイランも訪れた。一泊 2 日の短い滞在であったが、町には高速道路が縦横に走り、また、沢山の高層ビルが立ち並び、どこをどう車が走っているのかわからなかったのは些かショックであった。テヘランは、北にアルボルズ山を抱き、南に向かって緩やかな傾斜となっている。上から灌漑の水を流せば、それは自然に南の方に流れていくわけで、事実そうした方法で街路樹に水を与えている。テヘランとは長いかかわりであり、私はテヘランのどこに

いても道に迷わない自信があったが、今回そうした自信はもろくも崩れてしまった。

話が脱線してしまったが、テヘランで変わっていたのは、大臣や官僚など指導者の顔ぶれと風紀・道徳の類であった。当然のことながら、革命前に知った大臣・次官など一人もいなかった。

また、女性の服装・行動には大変な制約が課されており、街中の商店やレストランも昔のように何でもあるという訳ではなかった。

家族と共に赴任

私の現地視察の結果いかにかわらず、家族は私に同伴して現地に同行する覚悟のようであった。娘 2 人(長女 9 才、次女 8 才)にとっても、そこで生まれ、殆ど記憶には残っていないようであったが 5 年前まで生活していた場所であり、そこに戻る事に殆ど違和感はないようであった。

革命前には生徒数数百人を数えたテヘランの日本人学校であったが、革命後は、在留邦人の激減で、生徒数も 10 数人、大半は大使館職員と日本人学校の先生の子弟であり、一人の先生が 2 学年を同時に教えるという複式学級であった。それでも、学校があったのはありがたかった。先生と生徒、生徒同士は大変緊密な関係を作り上げ、少人数学級のよさが発揮されたようで、娘 2 人も最後まで帰りたいとは言わなかった。

家内にとっても、テヘランはそもそも私と結婚する前から両親と生活し、また結婚後も 2 人の娘を産み、外交官夫人として 5 年間過ごしたところであり馴染みが深かった。

国王時代と比べれば、女性への制約は大きかった。外国人の女性でも頭はスカーフで覆わねばならなかったし、素肌を露出させることは許されなかった。また、私は自宅での設宴を頻繁に行ったが、その準備は材料の買い出しから調理まで家内がほぼ一人で切り回した。材料集めが大変で、必要な材料を一箇所では集めきれず市内をあちこちと走り回っていた。家内は、ペルシャ語で簡単な会話なら出来るし、国王時代も自分で車を運転し市内の地理には精通していた。サウジ・アラビアと異なりイランでは女性が一人で車を運転して外出できたのは幸いであった。

85 年の春には、イラクによるテヘランへの攻撃が始まり、半年ほど家族を

日本に返さざるを得なかったが、それ以外は家内はいつも、子供の学校への送り迎え、大使館や学校の行事、設宴のための買出し等々、自分で運転して市内を走り回っていた。自分で運転しての走行距離では、邦人の中で家内が一番であろう。

私が、仕事に集中し、思いどおりに働けたのもそうした家内の存在と協力があったのことに感謝している。

私の使命

赴任にあたって、外務省の幹部からは仕事の上で二つの点を指示された。

一点目は、革命後の政権は国王時代と人も様変わりし、また政権としての考えもよくわからない。政治・軍事・経済・社会・宗教いずれの面をとってもどのような政策を実施しようとしているのか、わからないことだらけであるし何より情報量が圧倒的に少なすぎる。以前であれば、米国初め地域にかかわりの深い西側諸国が情報面でも頼りになったが、今はそうも行かない。ともあれあらゆる情報を集めて送って欲しい、そのための体制を整えて欲しいと言う事であった。

二点目は、最高指導者であるホメイニ師は高齢であり、いつまでも健在というわけにはいかない。テヘランには 5、6 社の本邦マスコミ関係者が常駐している、仮に万が一の場合にはマスコミに遅れずに情報を収集して報告して欲しいというものであった。イラン・イラク戦争についても同様で、ホメイニ師は 100 年かかっても勝つまで続けるといっているが、いずれ終結するであろうから、その情報でも負けないうようにと言われた。

一点目については後で詳述するが、二点目について結論を言ってしまうと、私の在勤中にはいずれもそうした事態は起こらなかった。

しかし、何度もホメイニ師重態との情報があり、その都度確認のため大使館の現地職員を走らせて、大使公邸の近くの師の居宅周辺を観察させ異状がないかを調べさせた。また、ホメイニ師は何度か体調を崩し医者診察・治療を受けた事もあった。そんな際は、師の健康情報の収集に全力を挙げた。

ホメイニ師の演説が報道されるときは、その中味もさることながら、顔の様子（殆ど表情はないし、また、テレビが歩いている姿を報じる事もない）、声の調子や演説の長さなど師の健康のバロメータとなるような点にも注意を

凝らした。師が暫く人前に姿を現さないときには、何か起こっているのではないかと、これまた大いに気がかりであった。

新聞を読みきる

東京に勤務中も、「シール夫人回想録」の翻訳を続けるなどペルシャ語とのかかわりを意識して保ってきたお陰であろうか、テヘランに着いて半月もすると、言葉の面も含めて現地での仕事・生活に急速に違和感がなくなっていたのは、我ながら意外であった。

内政と文化広報が一応の担当であったが、私の関心は現在のイランを知る事であった。

そのため、二つの事に全力を投じた。

第一は、公開情報である新聞・ラジオのニュースを最大限活用することである。

野村大使（のちにスウェーデン大使、アセアン・センター所長など歴任）からも、大使館の目・耳としての活動を求められ、具体的には、毎朝大使の執務室に関係者が集まり、そこで私がその日の現地語新聞の主要なニュースや論調を報告する事になった。

「テヘランの春」と謳われた革命直後の言論の自由はとっくに失われていた。また、英字紙は存在したものの 4 ページ程度のおさなりなものであり、これで世の中の動きがつかめるとは到底思えなかった。ペルシャ語の現地紙は、3、4 紙あり、中味は兎も角 15、6 ページはあり、目を通すだけでも大変であった。面白かろうが無かろうが兎も角読んでみる事にした。

朝のラジオのニュースを自宅で聞いた後出勤して、毎朝ほぼ 1 時間ペルシャ語紙の精読に当てた。はじめは時間が足りなくて、読み残しも多かったが、慣れるにつれて、書かれている中味にも、また言葉自体にも慣れてきてスピードが出てきた。1 年後には、これぞと思う記事はすべて読み通すことが出来た。

こうした作業を 2 年間も続けたであろうか、そのうちペルシャ語の後輩に朝の会議の報告はバトンタッチしたが、私自身の作業としてはその後離任まで同じ日課を繰り返した。

その効果は大きかった。二つある。

一つは、通訳としての仕事に役立った。もとより、そうした勉強は通訳として不可欠であった。

国王時代は、ペルシャ語通訳の出番は限られていた。国王はじめ大臣有力者の殆どは外国語に堪能であったし、むしろ外国語で話す事に誇りを感じているようでもあった。

革命政権下では、ホメイニ師も大統領や国会議長も閣僚も押し並べて、アラビア語は兎も角その他の外国語は出来なかった。また、長く外相を務めたベラヤティ氏のように英語を喋れる指導者でも、自国語を使う事が多かった。そのようなわけで、通訳の業務は急増していた。そもそも立派な通訳なしでは、大使の仕事は務まらないと言っても過言ではなかった。

通訳すべき会談の内容は多岐にわたるので、そのために毎日の新聞のあらゆる記事に目を通しておく事は大変有益であった。

もう一つは、イラクとの戦争が続く中で、新聞に対する政府の監視も厳しかったが、毎日新聞を丹念に読んでいて面白い事に気がついた。それは概して新味のない冗長な記事の中で、背後に何か事情がありそうな短い記述にぶつかったり、また関係者の宣伝じみた発言の中に公式には決して発表される事のない具体的数字などが紛れている場合があることだ。

何かありそうな事情については、後で情報の提供者に確認するようにした。

また、特に革命諸機関の実態が不明な中、関係者の折々の新聞インタビューなどでそれとなく具体的な数字が出てくる。これはその都度記しておいた。一例を挙げれば、宗教界による国民指導の有力な手段である金曜礼拝である。全国に金曜礼拝導師は何人いるのか。84年12月23日のエッテラート紙に掲載された「イスラム革命におけるモスクの役割」と題する論考の中で、ザンジャニ師は全国で約400人、このうち主要都市の金曜礼拝導師はホメイニ師自らが任命しているとしている。

革命も月日を連ねるなか、国民生活は一向に改善しないどころか却って悪化する。多くの国民の体制に対する幻滅も増すが、革命体制は崩壊しそうにない。なぜなのか。

革命政府は、イラクとの戦争継続、国際的孤立、外貨の枯渇という厳しい環境の中で、国民全体の支持取り付けということは考えずに、自らの支持層、すなわち被抑圧者層に対して集中的に働きかけ、限られた資源を集中する事

で、困難を乗り越え、かつ、体制の存続・強化を図ろうとしている。そうした政策の実施機関が革命諸組織であろう。そうした前提の上では、革命諸機関に関する具体的な数字を新聞記事のちょっとした言及の中から集めることで、体制内の仕組みを具体的な数字をもって説明できると考えた。

そうした作業の結果を、85年の「中東研究」302号と303号に、「イラン革命後の社会組織」と題して発表した。慎重を期して筆名を使うと共に、引用した数字にはすべて出典（大方は新聞の記事）を明らかにした。その後の事情は承知しないが、それまで謎に包まれた革命諸機関の活動を数字入りで紹介した論文を目にしたことはなく、貴重な作業になったと自負している。

人脈造り

次は、人脈造りである。何しろ国王時代の私の知り合いの多くが消息不明である。革命政府の高官は、相手にも警戒感があり、兎も角杓子定規であり、取っ付きにくい。特に、力を蓄えていく革命諸組織にいたっては、近付くことすら容易でないことは想像もつく。そこで、まずは政治とは直接関係のない文化人・知識人との交流に力を注いだ。

ペルシャ文化の伝統は革命によっても途切れる事はなかったが、文化・芸術関係のイラン人が仕事・生活の上で大変苦勞しているのもこの目で目撃した。

革命政權は、ペルセポリスなどのペルシャ帝国以来の遺跡・文化を破壊しはしなかったが、これを積極的に保護する立場でもなかった。伝統工芸（ミニアチュア、絨毯、絵画）や芸能（音楽）、現代音楽・美術・映画更にはスポーツ関係者の多くが活動の場を失い、従って生活にも苦勞していた。多くの芸術・芸能関係者が革命により国を離れたであろうが、それでもまだ関係者が残っており、幸いその多くの人たちと懇意になった。彼らは、閉塞した環境の中で自由に話せる外国人、特に外交官との交流を喜んだ。外交官と一緒にあれば、治安関係の革命機関に踏み込まれる事もないし、また彼らのコンサートや展覧会・展示会を自宅で開催しようと言う外交官も少なくない。

革命後、イランの金持ちの多くが国外に逃れ、また米国人はじめ多くの西側諸国の人々が姿を消した。その結果、外国人向けに多くの邸宅が貸し出され、大変な借り手市場となった。家主も、外交官に貸しておけば家を革命機

関に押収される心配もないし、何より必要な外貨が得られるという事で、我々でも大きな屋敷が借りられた。そんな中で、大きな自分の家敷でイランの民族音楽の奏者を呼んでコンサートを開いたり、絵の展示即売会をする外交官も出てきた。

文化担当官として、私も早速真似た。何度もやったが、そのうち此方から頼まなくとも相手から申し出があったりしたが、それはお断りして、あくまで親しい友人のための催しとした。絵などの展示会では、私もいく度か購入したから、帰国の段には質は兎も角いくつか絵を所有する事になった。

娯楽の少ないテヘランでは、こうした催しが楽しみであった。余談となるが、外交団の楽しみに、この他ワインの試飲会がある。革命下のイランではアルコールはご法度である。しかし、イラン人も結構自宅でワインを造り飲んでいたし、外交官の中でもそうするものが多かった。自慢のワインを持ち寄っての試飲会があったし、また、ワインを試飲して銘柄を当てるといった試飲会もあった。

芸術・芸能関係者との人脈を広げる中で、自然と政治の話が出来るグループもわかってくる。革命組織の幹部や宗教界の指導者とどう知り合うかが課題であった。結局そうして知り合った友人に紹介してもらう事になる。友人となったひとりに馬術連盟の会長がいた。

若いが、革命には宗教界の指導者と共に加わったとのことであった。最初は、テヘラン郊外の馬場に家族ともども連れて行ってもらい、子供と一緒に馬に乗せてもらった。親しくなるにつれて、宗教界の指導者を紹介してくれるようになった。上述のザンジャニ師もその一人で、同師が主管するテヘラン南部のモスクで会った。革命成就後の最大の課題は治安の維持であり、自分も革命委員会を組織してその任に当たったと言っていた。

また、革命成就後の即決裁判で、旧体制下の要人(ホバイダ元首相、ハラアトバリ元外相、ニークペイ元テヘラン市長など)を即刻死刑にしたハルハリ師を紹介してくれたのも彼である。このときは、政治的な話は一切しないという条件がついていた。ハルハリ師は激しい気性の人かと想像していたが、随分物静かな温和な人であった。

情報提供者

大使館の活動では、どうしても信頼の出来る情報提供者が必要になる。

以上のような付き合いを通じて多くの人と知り合い、何人かの情報提供者も見つけた。

革命後、しかも戦争中の国である。外国の公館に情報を提供するというのは相手にとって命がけである。また、相手国の送り込んできたスパイ（二重スパイ）もありうる。従って余り無理はしなかった。それでも何人かの協力を得る事が出来た。

そうした情報提供者の一人について後日談がある。

イランの後、私はジュネーブの日本政府代表部に約3年間勤務して、イラクによるクウェート侵攻の始まる90年8月に帰国した。当初は外務省に設けられた対策本部の仕事を手伝うが、暫くして、経済協力局の調査計画課の首席事務官に任命される。首席事務官としてODAの軍事使用禁止などの原則を改めて明確にする作業に忙殺されていた。それは湾岸戦争のさ中、サダム・フセインが自国のクルド人に対して使用した化学兵器が、日本がかって資金協力した化学肥料工場で製造されたのではないかとの疑惑（調査の結果ではそうした事実は無かった）を背景として、改めて政府としての援助政策を明確にする必要に迫られたからである。

そんなある日、私の机の前にひょっこり斉藤外務審議官(後、次官)が姿を見せた。私がイランを去った後、イラン大使をされたので、私は直接仕えたわけではない。私は、何かといぶかしがったが、外務審議官は一言、イランでは、私が作り上げた情報提供者のネットワークに厄介になりました、ありがとうと言われた。それ以上の話ではなかったので私にはあまりピンと来なかったが、暫くして、雑誌『中央公論』に、斉藤さんを紹介する記事がありそれを読んで合点がいった。

さしものイ・イ戦争も88年8月にはイラン側が安保理決議を無条件に受諾して停戦を迎えるが、その後の話である。イラク空軍機が大挙してイラン南部の空軍基地に移動してくるという事件があった。停戦後とはいえ、信じがたい話である。クウェートへの侵攻に際し、米国の反撃に備えてイラクが自国空軍機を一時イランに避難させたものであるが、この情報を逸速く大使館に知らせてきたのが私の発掘した情報提供者とのことであった。米国が、

イランとの外交関係を絶ったままの状態が永続化する中で、日本の現地情報は貴重であった。斉藤さんは、外務省のペルシャ語専門家たちが代々築き上げてきた地道な努力の成果であるとして褒めてくれたのだった。

イランでの必死の努力は無駄ではなかったようだ。

邦人の避難

革命後の、しかも戦争下、テヘランでの生活は容易ではなかったものの、私にとっては充実したものであった。また、家族の苦労も大変であったと思うが、誰一人帰りたいと言いつすものもなかった。

イラクとの戦争は、南部を中心として、両国の国境地帯で展開されていたから、テヘランにいる限り命の心配はなかった。それでも、こう着状態の中での消耗戦は、物資の不足や戦傷者の増加と言う形でテヘランにいる我々の眼にも次第に明らかになっていく。85年3月になると、攻撃は相互の首都にまで及ぶ。

テヘランの金曜集団礼拝では、ハメネイ大統領やラフサンジャニ国会議長などが導師となって礼拝を主導するほか、演説を行う。演説は宗教講話と時事問題の2部からなる。ラマダン月(断食月)が夏に重なると導師は大変である。暑い最中、一日中飲み食いも出来ない中で、往々にして1時間以上の大演説をやるのである。革命と戦争を同時に遂行しなければならない宗教政権にとって、被抑圧者と呼ばれる支持者層への精神的指導と物質的支援は最重要事項である。被抑圧者とは、まさに金曜礼拝に参加するような人たちである。

政治指導者でもあるテヘランの金曜礼拝導師の演説は、私たちにとっても重要な情報源であり、ラジオの同時中継に耳を傾けた。戦争の首都への拡大に際しても、ラフサンジャニ国会議長が、金曜礼拝の演説でこれからバクダッドにミサイルを打ち込むと警告し、その通りとなった。私たちは、早速イラクの日本大使館に連絡し、警戒を促した。

空軍力で圧倒的に優位に立つイラクのテヘラン攻撃は航空機による爆弾の投下であった。

かなり高空を飛行するイラク機は、最初は攻撃の精度も悪く、どこを攻撃目標にしているのかよくわからなかった。最初の晩の攻撃では、日本人学校

があり邦人が多数居住する地域の日本人学校教員の家の近くが被弾した。当然のこととして、邦人社会は大きな不安に包まれる。攻撃は夜になされるから、明かりも消さなければならない。被弾に伴う爆風によりガラスが割れ、飛散するガラス片で怪我をする事が多いから、玄関や窓などあらゆるガラスに飛散防止のテープを張った上、ベッドのソファを窓ガラスに立てかけて飛散防止をはかった。我が家でも、階段の下、どこからもガラス片が飛んで来ない場所に家族4人休む事にした。

そんな生活にも限界があり、定期便の飛んでいる内に家族は日本に避難帰国する事になった。灯火管制下の真っ暗なテヘランの飛行場で家族を見送って、ほっとすると共に、自分一人がらんとした我が家に戻ったときには、これからどうなるのか心細い事この上もなかった。

イラクがイラン領空の飛行を禁止し、命令に従わない航空機は撃墜する、それを48時間以内に実施すると発表して、邦人社会はパニックとなり、大使館は多忙を極めた。幸い、トルコの好意で希望する邦人全員が脱出できた経緯は、NHKテレビの番組「プロジェクトX」で紹介された。

ラフサンジャニ国会議長の訪日

邦人の脱出、家族との離別がイラン在勤中の悲しい出来事とすれば、最も楽しい思い出は、85年7月、ラフサンジャニ国会議長の訪日にペルシャ語通訳として同行したことである。

国会議長は、革命政権の序列では、最高指導者ホメイニ師、ハメネイ大統領に続く3番目であろうが、実際に軍事・政治を切り盛りしていたのは議長である。戦争遂行が至上命令である中で、死活的に重要な武器の調達のために鬼門であるイスラエルや米国と秘密裏に接触したのも議長であった（後、イラン・コントラ問題として露見）。また、パイプが細り切った西側との関係修復を試みたのも議長である。

その中で議長が真っ先に白羽の矢を立てたのが日本である。

日本にとっても、イラン・イラク双方と友好関係を維持する西側の主要国として、紛争解決のための仲介努力を続ける中で、一方の当事国の最有力者の訪日は願ってもないことであつた。

議長は、中曽根総理や安倍外務大臣との首脳会談に加えて、長崎訪問を希

望した。実は、革命以前の国王の時代に、一度訪日の経験があり、そのときは教育関係の国際会議出席が目的であったが、同時に、広島を訪問している。今回はもう一つの原爆被災地長崎を訪問したいと、これは相当に強い要望であった。

長崎に同行し、議長と現地マスコミ関係者とのインタビューを通訳していて、議長の本音を知った思いがした。議長は、現地マスコミ関係者の質問に答えると同時に、自らもしきりに質問をする。米国から原爆を投下された長崎の人々が米国をどう思っているのか、繰り返し尋ねるのである。記者たちは、議長に質問をするのが仕事であり、従って、本気で答えるつもりもないのであろうが、それでも、過去は水に流して、米国と仲良くした結果今日の日本の繁栄があると答えるが、議長は納得せず、同じ質問を繰り返す。

議長にしてみれば、原爆を投下されて、何万という人が殺され、すべてが破壊されて、黙っていられるわけがないし許すこともできないはずであると考え、長崎の人々から米国に対する怒り・憎悪の声を聞けると期待していたのである。それが全く聞かれないどころか、答が日米の友好ばかりでは、不可解である。議長は更に質問を繰り返そうとするが、時間が限られている。そこで、空港までの車に地元の被爆者の方に同乗してもらい話を続けたが結果は同じである。

被爆した日本人が米国に復讐心を抱いているはずだという心情はなにもラフサンジャニ議長に限らない。特にイランの宗教指導者にはその傾向が強いように思う。

亡くなられたが、日・イラン友好議員連盟の会長であった自民党の藤尾衆議院議員は何度かイランに来られた。ある時、昼食をとりながら、カウンターパートのイランの国会議員(聖職者)と果てしない論争となったのが、日本人の米国に対する怨念の有無である。藤尾議員も、水に流して仲良くする事を力説するが、相手はそれではいつまでたっても正義は実現せず、問題は解決しないといって譲らなかった。

イラクの侵略を水に流して許すと言えば、最高指導者ホメイニ師の100年かかろうが不正義の目を絶つまで戦い続けるとの最高方針に反することになるが、それ以上に正義のための戦いというのは国王の弾圧に堪えてきた宗教界指導者達の信念であろうし、更に言えば、ペルシャ帝国の時代以来、幾多

の興亡を経験してきたペルシャ人の性（さが）なのであろう。

イラン・イラク戦争は、幸いホメイニ師が存命中に停戦が実現した。声明で師は、「毒を飲むことよりつらい事だが、神の意思に従い、その御心をまた満たさんがために、私はこれまでの栄誉を投げ捨てて毒を飲んだ」と述べた。

ラフサンジャニ議長や宗教界指導者の懸念は、その後サダム・フセインがクウェートに侵攻する事で現実のものとなってしまった。

イランが核開発に繋がりうる原子力開発問題にこだわるのもこうした真情と切り離しては考えられない。

イラン以後

87年9月にイランを離任して以降は、イランとのかかわりは切れ、どちらかという途上国の開発協力、すなわち ODA にかかわる仕事が多かった。

ジュネーブの日本政府代表部では、UNCTAD(国連貿易・開発会議)が担当であったし、そのあと本省では、しばらく間を置いて、経済協力局の同じ課（調査計画課）で首席事務官と課長の2つのポストを経験した。課は、日本の ODA の頭の部分を担当するもので、ODA の基本法ともいえるべき「ODA 大綱」の下で、中期的な実施方針である ODA 中期政策、更には、分野及び国別の援助計画を策定するのが主要任務であった。また、日本の ODA の政府報告書である ODA 白書も編集した。

課長時代は大変充実していた。最初の ODA 中期政策を発表できたし、沖縄サミットに際しては保健・医療分野の日本の援助方針である「沖縄感染症イニシアティブ」をまとめた。また、中国に対する援助のあり方が曲がり角を迎える中で、多くの識者の方々にも協力いただいて中国への援助指針となる「中国経済協力計画」もまとめる事が出来た。

ODA 白書も3年分をまとめたが、相当な部分を自分で書き下ろした。

2001年の最後の3ヶ月は、アフリカ審議官組織担当参事官として、日本が主導したアフリカ支援のための国際的枠組みである TICAD（アフリカ開発東京国際会議）の第2回・第3回会議の中間点での閣僚級レビュー会合の準備と実施に奔走した。レビュー会合とはいえアフリカ 53 カ国の多くの国から閣僚クラスの出席があり、また、ドナー、国際機関からも出席する大会議である。会議に加えて、個別の会談も無数あり、小泉総理や田中外務大臣に

加えて、外務副大臣・政務官も動員しての対応であった。

話は前後するが、96年から99年までの3年間は、インドの日本大使館で経済・経済協力担当参事官として勤務した。

インド経済がちょっとしたブームで日本の産業界の関心も高まりつつあった。97年などは1年間に総理経験者が4人もインドを訪れるほどで私も多忙を極めた。

しかし、翌年春の核実験の実施で、日本政府の対印経済協力は抑制を余儀なくされ、日本の経済界のインド進出意欲にも水がさされて、経済・経済協力の仕事は大幅に減った。インドは、国自体が一つの多様な世界であり、興味が尽きない。全国を旅行し見聞を深めると共に、なぜこれだけ多様、複雑に利害が対立しながら、一国としてまとまっていられるのか、なぜIT産業がインドに適しているのか、カースト制度の存在意義は、などといったことを議論し考えていた。